

スポーツ科学研究, 11, 146-158, 2014 年

## 競技レベルの違いとコーチング・メンタルモデル

### —X 県内高校サッカー指導者の事例研究—

## The difference of competition level and coaching mental model

### -The case study of high school soccer coach in X prefecture-

加藤 篤<sup>1)</sup>, 堀野 博幸<sup>2)</sup>

Katou Atsushi, Horino Hiroyuki

<sup>1)</sup>細田学園高等学校

Hosoda Gakuen High School

<sup>2)</sup>早稲田大学スポーツ科学研究科

Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

キーワード：コーチングモデル、サッカー、質的研究、メンタルモデル

Key words: coaching model, soccer, qualitative research, mental model

#### 【抄 録】

本研究では県の大会で上位の成績を収めている X 県高等学校サッカー部の指導者 9 名を対象に、指導者のコーチング・メンタルモデルを明らかにすること、また、各指導者のコーチング・メンタルモデルの共通性と特異性が競技レベルに及ぼす影響を検討することを目的とした。

データ収集には、6 名の指導者に半構造的自由回答インタビューを行った。データ分析は、Côté et al.(1993)による質的データ分析法に基づき行った。

その結果、対象者の共通性として、「取り組む姿勢」、「選手支援」、及び「人間教育」の大きなカテゴリーがみられ、全ての指導者が「人間教育」を一番大切に考えていることが明らかとなった。本研究結果から、同等の競技レベルのチームを指導する者は、類似のコーチング・メンタルモデルを持つことが明らかとなった。また、競技成績に関しては、指導者の考え方の違いではなく、徹底度合いの違いである可能性が示唆された。

スポーツ科学研究, 11, 146-158, 2014 年, 受付日：2013年11月11日, 受理日：2014年4月7日

連絡先：加藤 篤 〒202-0021 東京都西東京市東伏見2-7-5 体育教室棟205

E-mail:infinite-colours@hotmail.co.jp

#### I. 序論

スポーツの指導現場において、指導者は、選手の年齢、性別やその時々状況など、複雑な要素が絡み合う中から、常に一番良い指導を選択することが求められる。また、北村ら(2005)が「こうした状況を捉え行動を決定する枠組みは“メンタルモデル”によって説明することが可能である。」と述べているとおり、指導者が

現場で様々な事象を捉え、指導行動を決定するまでの枠組みを明らかにする研究として、質的研究法を用いたメンタルモデルの研究が行われてきた。

Johnson-Laird(1983)は、メンタルモデルを「心の中でもつ表象(イメージ)であり、それを操作することによって問題を解決するのに使われるもの」と述べている。さらに、北村ら

(2005) は, スポーツ指導者の持つコーチング・メンタルモデルについて「指導者が選手の指導にあたり, 心内に構築していく理解内容であると同時に指導の拠りどころとなるもの」と述べ, コーチング・メンタルモデルを明らかにすることで「その結果指導者の指導観, 指導意図, 及び指導行動の全体が明らかとなる。」と述べている。

サッカーの指導者を対象とした研究では, 北村ら (2004, 2005) による研究で, ブラジルのプロフェッショナルなサッカー指導者と, エキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルとして, 「熟達化」, 「意識化」, 「支援」という 3 つのカテゴリーが示された。しかし, 日本とブラジルにおいて, サッカーの競技レベルは大きく異なる。国際サッカー連盟 (以下 FIFA) の世界ランキングでは, 日本が 44 位なのに対しブラジルは 11 位と高い成績を収めている。また, ユース年代においても, その競技成績には大きな差がある (FIFA, 2013 年 10 月 25 日閲覧)。このことから, 競技レベルに関わらず, 指導者は同じようなコーチング・メンタルモデルを持つことが推察される。しかし, この点に関しての検討はみられない。

また, 古賀ら (2013) の研究ではプロサッカー選手を輩出している J リーグ・ユースチームの指導者と高等学校サッカー部の指導者を対象にメンタルモデルの共通性と特異性を検討している。その中で, すべての指導者の共通性として, 「人間力の向上」, 「プレーのパフォーマンス向上」, 「指導者の姿勢」, を挙げ, J リーグ・ユースチーム指導者の特異性としては「プロ選手の育成」を, 高等学校サッカー部指導者の特異性としては「世界を意識した個の育成」を挙げていた。しかし, この共通性や特異性がプロ選手を輩出した指導者に限ったものなのかどうかについては検討が不十分である。

その他の研究に関して, Andrew et

al.(2011)は, オーストラリアのプロフェッショナルラグビー指導者, クリケット指導者を対象に, Côté et al.(1995) や Côté and Sedgwick(2003)は, オリンピックや世界大会出場レベルの指導者を対象に質的研究を行っている。しかし, これらの研究においても, 構築されたコーチング・メンタルモデルが高い競技成績を上げている指導者特有のものなのかという検討は不十分である。

このように, これまでのコーチング・メンタルモデル研究では, 全国レベルの大会や国際レベルの大会で優れた競技成績を収めている選手やチームの指導者を対象にしたものが多く, 都道府県レベルや地区レベルの大会で優れた成績を収めているチームの指導者を対象にした研究は見当たらない。

そこで本研究では, 高等学校サッカー部の指導者の事例から, 県大会で上位の成績を収めている高等学校サッカー部の指導者が, どのようなコーチング・メンタルモデルを持って指導にあたっているかを明らかにすることを第 1 の目的とした。また, そのメンタルモデルに関し, 同レベル指導者が, なぜそのようなメンタルモデル構築に至ったのかという背景を明らかにし, 全国レベルの大会や国際レベルの大会で優れた競技成績を収めている選手やチームの指導者とどのような点が違うのかを検討することを第 2 の目的とした。

## II. 方法

### 1. データ収集方法

本研究では, 指導者の指導行動がどのようなコーチング・メンタルモデルに基づいて生起するのかについて深層的に明らかにするため, 1 対 1 の半構造的自由回答インタビューによりデータ収集を行った。インタビューは, 指導者の指導している学校施設内で行い, 平均時間は約 60 分であった。インタビューに先立ち, やまだ (2007) と北村ら (2005) の先行研究を

参考に、下記の 4 つの質問を設けた。

- (1) 練習中に選手に要求することは何ですか。
- (2) 試合中に選手に要求することは何ですか。
- (3) 学校生活において選手に要求することは何ですか。
- (4) 指導の中で最も大切にされているのは何ですか。

対象者には、インタビューの概要を理解してもらうため予め基幹的な質問項目を郵送した。インタビュー当日は、原則として予め作成しておいたインタビューガイドの質問項目に沿いつつ、インタビューの流れに応じて、コーチング・メンタルモデルを具体的、深層的に明らかにするため、質問を柔軟に変化させながら研究者自身がインタビューを行った。

## 2. 対象者

本研究では、X 県内の高等学校サッカー部で監督として選手を指導している 9 名の指導者を対象とした。対象者の選定条件は、北村らの先行研究（2005）で対象となったエキスパート高等学校サッカー指導者との差別化を図るため下記の 3 つを設定した。

- (1) 過去 5 年間、全国レベルの大会に出場した経験を持たないチームの指導者。
- (2) 過去 5 年間の全国高校サッカー選手権 X 県予選で県大会ベスト 16 以上の成績を 2 回以上納めているチームの指導者。
- (3) 現在のチームで 5 年以上指導を行っている指導者。

本研究では、これら 3 つの選定条件により選定された、県大会上位レベル指導者 9 名のうち 6 名のインタビューに成功した。対象者は全て男子サッカー部を指導する男性指導者で、5 名は私立高校、1 名は公立高校の部活動の指導者であった。

## 3. データ分析

インタビューによって得られたデータは、研究者自身によってテキスト化された後に、共同研究者とともにひとつ以上の概念あるいは見解を含む意味単位(meaning unit)に分けられ、その一つ一つに標題がつけられた。その後、すべての標題を比較し、類似した内容を持つ意味単位を共通の上位概念で括れるサブカテゴリーへと再編成し、それぞれのサブカテゴリーに標題をつけた。さらに、再編成されたカテゴリー郡をより広く抽象度の高いレベルのカテゴリーへと統合し、カテゴリー相互の関連性を見出す、という Côté et al.(1993)による質的データ分析法に基づき分析を行った。

なお、本研究では、それぞれの指導者がどのような考えを持ち、現場で指導にあたっているかを明らかにするため、指導者の考えの共通性、特異性の観点から分析を行った。

## 4. 信頼性の検証

信頼性の検証については、Culver et al.(2003)が推奨する方法を参考に行った。具体的には、(1)研究方法の明示、(2)半構造化インタビューによる質問の均質化、(3)共同研究者との点検の 3 つの方法を用い、信頼性を確保した。本研究では、3 名の質的分析を実施している研究者で、議論が飽和状態になるまで行った。

## Ⅲ. 結果

表 1～6 に示すように、123 個の標題が抽出され、45 個のカテゴリー、23 個の大カテゴリーに分析された。指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく。

表 1. 指導者 A 階層のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	取り組む姿勢が重要	やるときは集中してやる	一つ一つ集中して練習する
		主体的に取り組む	元気よく、自分がやるという姿勢
		努力する姿勢	いかに努力できるか、一日一ミリでいいから上手くなる
		取り組む姿勢が重要	全てに共通するのは物事に取り組む姿勢
		闘う姿勢	試合は戦争と一緒に、体を張るのは当たり前
	精神面のコントロール	精神面のコントロール	精神統一、自分でモチベーションを高めた上でピッチに入る
		程よい緊張感を持つ	程よい緊張感の中でプレーする
		試合を楽しむ	ゲームの楽しさ、サッカーをやる喜びを感じて欲しい
	仲間と想いを共有する	仲間と助け合う	サッカーはチームプレーで助け合いが必要
		仲間と想いを共有する	自分の意見をお互いにぶつけ合わないとうまくならない
		仲間と声を掛け合う	気づいた奴がどんどん声を掛ける
		プライドと自覚	みんなの中の代表というプライドと自覚を持たせる
	課題を意識づけ、克服する	気づきを整理しておく	サッカーに関する日ごろの気づきを書いて整理しておく
		課題を意識づける	ゲーム直前には練習でやってきたことを確認し、意識づける
		練習の成果を発揮する	練習でやったことを出さないと次の課題が見えない
		課題を克服する	チームの課題を克服するまでやる
選手支援	選手との信頼関係	指導者と選手の信頼関係	信頼関係ができていれば色々な指導が伝わる
		指導者が選手の模範になる	指導者が選手の模範となる
	愛情があった上での厳しさ	愛情があった上での指導	物事全て愛情がないとできない
		きっかけを与える	本人が気づき、変わるきっかけをいかに与えるかが重要
人間教育	一番大事なのは人間教育	一番大事なのは人間教育	サッカーの指導も人間教育が基本の土台
	学校生活、私生活がサッカーに繋がる	学校生活、私生活がサッカーに繋がる	私生活、学校生活がいい加減な者がサッカー上手くなるのは無理
	学生のうちに人間性を鍛える	聞く耳を持つ	聞く耳の持てない者は成長しない
		常識・マナー・道徳について厳しく言う	常識・マナー・道徳について厳しく言う
		責任を取らせる	子どもに責任を取らせないと過ちの重さが分からない
		学生のうちに鍛える	学生のうちは自分を鍛え、磨く期間
		社会に出た時を考えて指導する	社会に出た時を考えて指導する
		社会に出てから馬鹿にされないようにする	社会に出てから馬鹿にされないようにする
行動を起こす	観て、判断して、行動する	観て予測して状況判断	予測するために見る、その上で状況判断
		常に考えてプレーする	試合につながる練習になるように常に考えてやる
		考える力を身につけさせる	余計な手出しはせず、こどもに考えさせる
	行動を通じて学ぶ	行動を通して自ら学ぶ	自分が動いて観た上で判断する
		失敗が成長に繋がる	たくさん経験し、たくさん失敗することが成長へと繋がる
	行動することが大事	やらせることの重要性	身体で身につけるためにやらせることも重要
		行動することが大事	まずやる、行動することが大事
		自分にできることを一生懸命にやる	その時の自分に出来ることを一生懸命にやる
		意識しなくても行動できるのが理想	予測や状況判断ができていれば、自然と身体に身につく意識しなくても行動できる

表 2. 指導者 B 階層のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	サッカーに取り組む姿勢	勝ちにこだわる	勝った方が伸びしろは高い
		サッカーに取り組む姿勢、気持ち	自分をしっかり管理でき、追い込んでいける選手は伸びる
		考えてプレーする	10 のうち 7 教え、あとの 3 は考えさせる
		自分の持ち味を知る	自分や味方の特徴を分かることが大切
選手支援	指導者の伝える姿勢	指導者が妥協せず伝える	基本的に妥協すると選手に伝わっていかない
人間教育	社会で通用する選手の育成	相手に不快を与えない	相手に不快なことを与えないよう指導する
		世の中の厳しさを教える	世の中がどれほど厳しいか教える
		自主性	言われてやるのではなく率先してやることが大事
	仲間との関わり合い	最高の友達になる	良い汗かいたり良い涙ながしたりするのが最高の友達
		味方とのコミュニケーション	味方とコミュニケーションをとることが大事
		自分に自信を持ち、味方を叱咤激励する	自分に自信を持ち、味方を叱咤激励する
パフォーマンス向上	パフォーマンス向上のための知識・理解	相手がいる中での技術	敵がいる中で技術を生かす
		戦術指導	ゲームの中での戦術への理解度が大切
		サッカーのための食事指導	食事の指導は身近だが手を抜きがち

表 3. 指導者 C 階層のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	取り組む姿勢	手を抜かず全力で練習に取り組む	向上するため手を抜かないで全力で取り組む
		物事の取り組み方を重要視する	物事の考え方、取り組み方を教えることが結局はサッカーに生きてくる
		主体的に練習に取り組む	選手自らが積極的に主体的に取り組むことが大事
	選手に気付かせる環境作り	やらなきゃダメだと気付かせる	自分たちがやらなきゃダメだと気付けば手を抜かない
		高いモチベーションを持てる雰囲気作り	全員が高いモチベーションを持てるように工夫する
		やらせる練習の必要性	状況によってはやらせなきゃいけない
	内容があつての勝負	練習でのテーマを試合で発揮する	普段の練習で要求してることをゲームでそのまま発揮することを要求する
		内容を要求したうえでの勝ちを目指す姿勢	内容を要求したうえでの勝ちを目指す姿勢
選手支援	指導者の内省	多くを求めすぎない	最初から多くを求めてもできないので、目標から逆算して考える
		指導を深く考える	やってるうちに考える余裕ができ、自分の指導に対する考えが深まった
	指導者の選手への接し方	指導者が選手と向き合う	指導者が生徒・サッカーと向き合って子供たちと接すれば、子供たちは感じるものがある
		生活指導も選手との信頼関係	生活面の指導も指導者との信頼関係が大事
人間教育	サッカーを通じて人間性を高める	生活面がサッカーに繋がる	生活面ができない選手はサッカーもできない
		サッカーを通じて人間性を高める	サッカーを通じて人間性を高めることが全てだと思う
		生活面をしっかりさせる	学校の生活が基本
周囲への貢献	周囲への貢献	応援され、愛される部活動	学校に貢献することで、周りから愛され、応援されるクラブになる

表 4. 指導者 D 階層のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	勝つことにこだわる	勝つことにこだわる	どんなに無様でも勝つことにこだわらせる
		勝つために考える	どのようにしたら勝てるか考えてほしい
	どういう気持ちで取り組むかが重要	積極性と冷静な判断	積極性があるて且つ冷静な判断が重要
		トレーニングの成果を出す	トレーニングの成果を出す = 自分たちのやりたいサッカーをゲームで表現する
		足を動かす、声を出す	勝つためには足を動かすことと声を出すことが必要
		集中を持続する姿勢	集中を持続する姿勢
		どういう気持ちで取り組むかが重要	上手くなるために練習にどういう気持ちで取り組むかが重要
		疲れた時、苦しい時にどう闘えるかが大事	疲れた時、苦しい時に何ができるかが大事
人間教育	私生活がサッカーに繋がる	私生活をしっかりさせる	私生活がしっかりした社会人を育てる
		私生活がサッカーに繋がる	私生活とプレーは繋がる
		私生活からスポーツマンらしくする	私生活からスポーツマンらしくしっかりする
		私生活とサッカーのバランス	私生活とサッカーのバランスが難しい
		第一に高校生として育成する	プレーヤーである前に高校生であることが大事
		自覚を持たせる	看板を背負ってるという意識を持って欲しい
個の育成	社会で通用する個の育成	チームの前に個人を育成する	チームとして勝つ前に個人が上手くなることが目標
		プロの輩出が一つの目標	プロの輩出が一つの目標
		卒業後のステップアップを考える	高校より先のカテゴリーでのステップアップを考え育成する

表 5. 指導者 E 階層のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	自分を高める姿勢	常に研ぎ澄まされた状態で自分を高める	常に研ぎ澄まされた状態で自分を見つめる
		明るく元気に、自分を鼓舞してプレーする	常に明るく元気に、自分を鼓舞して練習に取り組む
	サッカーに対して情熱を持つ	サッカーに対して情熱を持つ	練習やサッカーに情熱がないと 100 回やって 100 回できる状態にはならない
		自信が持てるまで準備する	ベストパフォーマンスのための良い準備
	自信が原動力となる		反撃の原動力はやってきたことに対する自信
	勝ちにこだわる	どんなゲームでも勝つことを目指す	どんなゲームでも勝つことを目指す
選手支援	指導者の役割	良いプレーを褒め、ダメなプレーを否定する	良いものは褒め、ダメなものとは徹底的に否定する
		選手がいたという証を作る	高校生活での証、生きてきた証を作ってあげられるのが監督、コーチ
		後々になって分かればそれでいい	後々になって分かってくればそれでいい
	指導への影響	指導の変化がベスト 8 までを楽にした	指導者が変わることで 8 までの道は苦労しなくなった
		優秀な人材を見れたことが現在の指導に影響している	高校時代、優秀な人材を見れたことが現在の指導に影響している
	伝え方の工夫	ベスト 8 から 4 へは壁がある	8 から 4 になるには指導者・選手ともに壁がある
		環境面が厳しい中での工夫	物理的な環境面が厳しい中で工夫を心がける
		今の子を指導することへの難しさ	今の子は気持ちのスイッチが入らない
	人間教育	サッカーを通じた人間教育	言い訳せずに勉強することがサッカーに繋がる
サッカーを通じて人間として一流になることを要求する			サッカーだけでなく人間として一流でなくてはならない
自分に対する怒りが変化のポイントになる			自分に対する怒りが変化のポイントになる
私生活がいい加減なものには罰を課す			私生活がいい加減なものには罰を課す
時間を守ることの重要性			時間を守ることが人間の生活の中で一番大事
周囲への貢献	周囲への貢献	感謝の気持ちを持つ	感謝の気持ちを絶対に持つ
		観てる人に憧れを与えるサッカー	高校生でも大人を喜ばせ、年下の子の憧れにもなれる
		サッカーの文化的役割	文化活動の中で人にメッセージを伝える役割もサッカーにはある

表 6. 指導者 F 階層のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
選手支援	選手との距離を近くする	選手との距離を近くする	選手の中に入って伝える
人間教育	チームを結束させる	チームを結束させる	チームスポーツの良いところは一つに結束すること
		応援される選手を育てる	応援される人間性であればいい
	人間性がサッカーに繋がる	人間性が良くなるとチームが強くなる	人間性が良くなるとチームが強くなる
		自覚を持たせる	クラブ生の代表格としての自覚を持たせる
	自覚を持たせる	自分たちのことに責任を持つ	自分たちのことに責任を持つ
		勉強を疎かにしない	部活に迷惑をかけない為にも勉強する
パフォーマンス向上	運動量とスピードが基本	サッカーの基本は走ること	サッカーの基本は走ること
		ブレースピードを上げる	走る速さを持っていない者はブレースピードを上げる
		運動量とスピードが一番伝える部分	運動量とスピードが一番伝える部分
	長所を伸ばせる環境作り	今持ってるものを伸ばすことで戦力になる	今持ってるものを伸ばすことで戦力になる
		毎年選手が変わるのが高校サッカーのデメリット	毎年選手が変わるのが高校サッカーのデメリット
		モチベーションを高める環境作り	気を抜いたら落とされることで毎日頑張る
勝ちにこだわる	勝ちにこだわる	勝つことだけを要求する	勝つことだけを要求する
我慢を学ぶ	サッカーを通して我慢を学ぶ	サッカーを通して我慢を学ぶ	サッカーを通して我慢を学ぶ
		ルールを守る	ルールや制限を与えるのは、そのことによって良くなるから
		ズルしない、誤魔化さない	ズル・誤魔化しに対してはすごく怒る

## 1. 共通性

6名の指導者のうち、5名の指導者に「取り組む姿勢」の大カテゴリーが、共通してみられた。「取り組む姿勢」に関して、5名の指導者は、選手が自身の精神面をしっかりとコントロールし、サッカーだけでなく、学校生活や私生活においても自己の人間的成長へと繋げていく姿勢を重要視していることが明らかとなった。例えば、指導者 A は「サッカーはチームプレーで助け合いが必要」と述べて、「自分の意見をお互いにぶつけ合う」ことがチームを良くしていくと考えていた。また、指導者 B は「考えてプレーすることや「自分の持ち味を知る」こと、指導者 D は「疲れた時、苦しい時にどう闘えるかが大事」ということ、指導者 E は「自信が持てるまで準備する」ことを重要視していた。

次に、4名の指導者に「選手支援」の大カテゴリーが、共通してみられた。「選手支援」に関しては、指導者が選手とどのように信頼関係を築き、どのような伝え方で選手に指導してい

るかを重要視していることが明らかになった。例えば、指導者 A は、「信頼関係があれば、色々な指導が伝わる」と述べ、その中で「本人が気づき、変わるきっかけをいかに与えるかが重要」と述べていた。指導者 B は「妥協すると選手に伝わっていかない」と述べ、指導者が妥協なく情熱を持って選手を指導することが大切であると述べている。また、指導者 C は、「指導をしているうちに、考える余裕ができ、自分の指導に対する考えが深まった」と述べ、指導者 E は、「指導者が変わることでベスト 8 までの道は苦労しなくなった」の述べていた。指導者 F は「選手の中に入って伝える」と述べ、指導する際の物理的距離間も重要視していると述べていた。

さらに、6名の指導者全員に「人間教育」の大カテゴリーが、共通してみられた。「人間教育」に関しては、選手への生活指導や、サッカーを通して選手の人間性を高めていくことを重要視していることが明らかとなった。例えば、指導者 A は、「社会に出た時を考えて指導する」

ことが大切であると述べ、特に「常識・マナー・道徳について厳しく言う」ということを重要視していた。また、指導者 B は、「相手に不快なことを与えないよう指導する」ことや、「世の中がどれほど厳しいか教える」こと、指導者 D は、「プレーヤーである前に高校生であることが大事」であるということ、指導者 E は、「サッカーを通じて人間として一流になることを要求する」ことを重要視していた。指導者 F は、「人間性が良くなるとチームが強くなる」と述べ、サッカーだけでなく、選手が生活面でルールやマナーを守るようことを重要視していることが明らかとなった。

## 2. 特異性

指導者の内省から生まれた、その指導者独自の考えを「指導の個性」としてまとめた。

これに関して、指導者 A は、「行動を起こす」ということを述べており、サッカーだけでなく学校生活や私生活においても、状況を考え主体的に行動するということが重要視していた。

また、指導者 B は、「パフォーマンスの向上」について述べており、「パフォーマンスの向上」を可能にするために技術指導から食事の指導に至るまで、独自の考えを持ち指導に当たっていることが明らかとなった。

指導者 C は、「周囲への貢献」ということを述べ、「応援され、愛される部活動」であることが大切であると考え、指導に当たっていると述べていた。

指導者 D は、「個の育成」ということを挙げ、

サッカー選手としてのみならず、社会に出た時に社会人として通用する個人を育成することが、チームでの勝利よりも大切であると考えていた。

指導者 E は、指導者 C と同様に「周囲への貢献」ということを述べていた。しかし、指導者 C とは多少異なり、周囲の人々に対して感謝の気持ちを持つことや、サッカーを通して、見ている者にメッセージを伝えることなどを大切にしながら指導に当たっていることが明らかとなった。

指導者 F は、「パフォーマンス向上」、「勝ちにこだわる」、「我慢を学ぶ」という 3 点について述べていた。「パフォーマンス向上」に関しては、「運動量とスピード」という点を最も重視しており、走ることや判断の速度を大切にしていると述べていた。また、「勝ちにこだわる」については、「勝つことだけを要求する」と述べ、練習中のミニゲームから練習試合や公式戦に至るまで、選手たちに勝つことのみを要求しながら指導に当たっていると述べていた。さらに、「我慢を学ぶ」に関しては、「サッカーを通じて我慢を学ぶ」ということを大切に、練習中だけでなく学校生活などに関しても、ズルや誤魔化しに対して絶対に許さないことを大切にしていることが明らかとなった。

## 3. メンタルモデル

対象者の共通性、特異性を踏まえ、図 1 に示すコーチング・メンタルモデルが構築された。



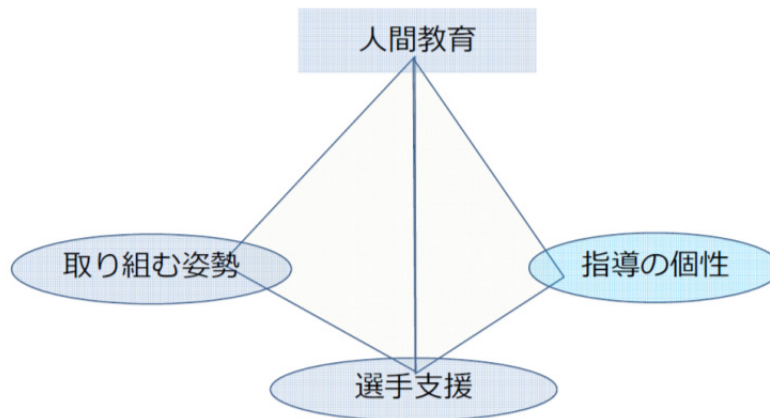


図 1. 県大会上位チーム指導者のメンタルモデル

#### IV. 考察

##### 1. 共通性

結果から 6 人の指導者のメンタルモデルが構築された。本研究では、指導者の特異性の観点から分析を行ったが、共通する部分もみられた。ここでは、指導者に共通してみられた部分について考察を進めることとする。

##### 1) 人間教育

本研究において全ての指導者に共通している部分として「人間教育」の大力カテゴリーが挙げられる。人間教育について黒田（2008）は、「高校世代にとって必要なのは、人間教育である。これからの人生を生きていくための基礎を固める大切な時期なのだ。人としての基本を身に付けさせないで、どうして選手が育つというのか。」と述べ、高校サッカーにおける「人間教育」の重要性を述べている。さらに古沼（2006）は、『『生きるということの基本姿勢を守る』ことがチームスポーツであるサッカーにも大いに繋がっていますから』と述べている。また、斎藤（2007）は、『『いい高校生がいいサッカー選手になる』ということも言いました。いい高校生というのは何か、言わなくても分かることです。『動物を教えるのなら鞭でたたくけど、お前たちは自分で考えられるはずだ』と諭しました。自らを律しなければ人間として成長することはできません。特にサッカーの選手

は常に自分で考えてプレーしなければならないのですから、そういう教えが必要だと考えました（斎藤、2007）。』と述べている。

このことから、多くの指導者が、「人間教育」の重要性を認知し、指導にあたっていること、また、サッカーと人間性の関係について、双方を分けて考えておらず、双方が繋がるものと考えていることが示唆されている。

しかし、人間性を高める中で大切にしていることには違いがみられた。本研究において、指導者 A は「行動を起こす」ということを、指導者 C, E は「周囲への貢献」を、指導者 F は「我慢を覚える」ことを挙げていた。古沼（2006）は、チームとしての「集団性」を、斎藤（2007）は選手が自分で考えてプレーすると言った「自律」を重要視している。このことについて山本（2006）は、「教育はあくまでもサッカーの一部分であり、サッカーは教育よりも大きなものだということを忘れてはいけない。」と述べている。また、本研究の指導者 F は、「ドイツ人のコーチの人が、サッカーは子供を大人にする、大人を紳士にするっていう有名な言葉を残したと思うんですけど、僕はそれはもうまさしくそれだと思うんですよ。」と述べている。さらに指導者 F は、「このスポーツをやることによって、人間が成長していく。そういうのがすごく含まれてるから。」と述べ、「だから僕は世界中で一番競技人口が多いスポーツなんだと

思うんです。」と述べている。これらの語りから、多くの指導者は、サッカーは様々な教育的側面を持っていると考えていることが分かる。また、北村ら（2005）は、心的支援について、「この心的支援が重要な理由の一つは、指導の対象がプロ選手とは異なり育成の過程にある高校生選手である点にある。」と述べている。そのため、県大会上位レベルの指導者も、選手の「人間教育」を最も重要視し、選手の人間性を育てるために、サッカーの教育的側面を重要視している可能性が示唆された。

## 2) 取り組む姿勢

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは、対象者全員に共通していたわけではないが、指導者 F を除く全ての指導者に共通していた。

「取り組む姿勢」の大カテゴリーも、「人間教育」の大カテゴリーと同様に、多くの指導者がサッカーに取り組む姿勢について述べ、サッカーと取り組む姿勢を切り離して考えてはいなかった。

サッカーに取り組む姿勢に関して柴田

（2008）は、「タレントを持っているのに長続きしない子も多い。つまり、取り組む姿勢が中途半端なんですね。」と述べており、いくら良い技術や才能を持っていても、取り組む姿勢が中途半端であれば、選手として長続きしないと述べている。また、山本（2006）は、「教育というのはサッカーの一部分だ、と言ったが、サッカーが持つ教育の側面とはこういう部分だ。おそらく選手たちには、『教えられている』とか『教育を受けている』という意識はないだろう。ただ自分の好きなサッカーを一生懸命やることで、自らを表現する方法を学び取っていく。（山本、2006）」と述べている。

このことから、多くの指導者は、選手をサッカーに向かわせることによって、選手が教育的な側面に無意識的に触れ、自ら様々なことを学び取っていくということを把握しているから

こそ、サッカーに取り組む姿勢を重要視している可能性が示唆された。

## 3) 選手支援

「選手支援」の大カテゴリーも、「取り組む姿勢」の大カテゴリーと同様に、指導者 D を除く全ての指導者に共通していた。

「選手支援」の大カテゴリーは、指導者がどのように選手に接するかに関して述べられた大カテゴリーであり、その内容は主に、信頼関係を築くことと、伝え方を考えることについて述べられたものであった。

大槻（2008）は、選手との信頼関係作りについて、「あと、『グラウンドを離れたら、俺はおまえらと同じひとりの人間。だから普通に話すよ。でも、グラウンドの中では俺の言うことを聞いてくれ』ということは徹底しています。」と述べている。また、本田（2009）は、「今は理論づくめの指導が中心になりましたが、ただ話して聞かせているだけではわからない場合が多い。だからこそ、挨拶や掃除、礼儀作法など地道なことから積み重ねて大人と話す機会を多く作らないといけない。自立心を養っていくことが指導者の大きな使命だと私は考えます。」と述べている。このことから、指導者は選手と話せる環境を作ることが重要視していることが分かる。これについて松田（2003）は、「わたしの持論のひとつが、指導論は恋愛論と人生論に通じるというものである。恋愛は男と女が、指導は先達が後輩を、人間が人間を『好きになる』ことからすべてが始まる。」と述べている。また、本研究の指導者 C は、「やっぱり子供が好きって言うか、まずそこかなって思いますけどね。」と述べた上で、「たまにね自分の為にやっちゃうっていうか、自分を守っちゃうっていうか、そうじゃなくてやっぱり子供の為にっていうふうにできることが一番いいのかなとは思いますが。」と述べている。これらのことから、多くの指導者は、まず選手

を好きになることが重要であり、自分のためではなく選手のために指導することが重要であると考えており、そのために選手と話しやすい関係や環境を整えておく必要があると考えている可能性が示唆された。

また、指導者の伝え方に関して、小峯（1992）は、「良いところは良い、とはっきりと認めてやる。悪いところは悪いと、キチッと叱る。この基本姿勢が指導者にきちっとできてなければいけません。」と述べている。これについて本研究の指導者 E は、「自分のポリシーとして、良いものは褒めますけど、ダメなのは徹底して僕は否定しますから。」と述べている。また、指導者 B は、「基本的に妥協はやっぱり良くないと思うんですよね。伝わっていかないと思うし。」と述べている。このことから、指導者は良し悪しの判断基準を明確に持ち、それを的確に選手に伝えることが重要であると言える。

これらのことから、指導者は、サッカーを通じた「人間教育」を行う上で、選手と話しやすい関係を作り、良し悪しの判断基準を明確に持ち、妥協なく的確に伝えることが重要である可能性が示唆された。

このように、多くの指導者は「人間教育」を最も重要視し、その中でサッカーにしっかりと取り組ませること、指導者と選手が信頼関係を持ち、妥協なく選手に指導していくことが重要であると考えている可能性が示唆された。

## 2. 指導者の個性（特異性）

先に述べたとおり、本研究では、指導者の特異性に着目し、分析を行った。先に考察した共通性は、多くの指導者が同じ考えを持っている可能性があり、それによって競技レベルに差異が生まれるとは考えにくい。ここでは、指導者の特異性が競技レベルとどのような関係にあるかという観点から、考察を進めていくこととする。

まず、指導者が特異性を持つことに関して、

小峯（1992）は、「ふつうのことを考え、ふつうのことをしては、ふつうのことしかできない」と述べ、突出した結果や選手を育てるためには、普通とは異なることをする必要があることを述べている。また、本田（2009）は、「守・破・離」という言葉を用い、「『守』とは基本。『破』とは基本から次のステップ、別の流派や別の師に学ぶこと。『離』とは新しい個性を生み出すことを意味します。スポーツも全く同じでしょう。まずは基本を学び、色々な人に学び、やがて応用し、自分流を見出す。指導者も選手もそういう過程を経て、大きく飛躍していくのです。」と述べている。

つまり、優れた競技成績を収め、優れた選手を育てるには、皆が考える一般的な考えを持ちながらも、そこから脱却していくことが必要であると言える。これは先に述べた「共通性」に関して同様であり、皆が共通して持っている考えから、その指導者独自の考えを見出していくことが、必要であると言える。

では「共通性」から独自の考えを見出すための要因は何なのであろうか。それは、指導者の内省であると考えられる。本研究の指導者 C は、「やってくうちにだんだん色んな部分を考える余裕が出てきて『ああやっぱ、やってることってこういうことなんだろな』っていう考え方になってきたのかなっていうふうには思いますけどね。」と述べ、指導に対する内省が深まったことにより、練習のやりせ方が変わってきたと述べている。また、指導者 E は、指導者ライセンスの講習会を通じ、指導者自身が変わったことで、県大会ベスト 8 までの道のりは楽になった、と述べている。さらに、指導者 F は、自分が監督になったことで、勝つことにこだわらせるようになった、と述べている。つまり、指導者自身が指導に対する内省を深めていく中で、だんだんと指導が変化し、本田（2009）が言う「自分流」が見出せてきたのではないかと考えられる。これについて横山・望月（2005）

は、「こうした教養を身に付けるためには、多くの選択肢を出来る限り多く体験し、さらに時間をかけて練るということにあるとのことですね。つまり自己形成ですね。」と述べている。このことから、指導者が多くの体験を経て、自身の指導を内省し、時間をかけて自分流を作り出すという「自己形成」が、指導者の特異性を生み出す要因になっている可能性が示唆される。また、上田（1992）は、「指導というのはさっきもいったように“焦らず欲張らず”が大鉄則なんですね。ところが、一貫性が持てない時というのは、指導者が“焦ったり欲張ったり”している時なんですね。そのことを指導者自身が分かっているかということですね。」と述べ、指導者が独自の考えを持ち、それを一貫して指導することが重要であると述べている。

これらのことから、指導者が自身の指導に対する内省を深め、自身の特異性を生み出し、それを一貫して指導できるかが競技レベルの向上に影響を与えている可能性が示唆された。

## V. 結論

本研究では、県大会上位レベル指導者を対象に、その指導者の哲学、価値観、知識、信念、理念についてインタビュー調査を行った。

その結果、県大会上位レベル指導者の共通性や特異性が見られる6つのコーチング・メンタルモデルが構築された。そのメンタルモデルから、指導者たちは、「人間教育」を最も重要視し、サッカーに「取り組む姿勢」や、指導者の「選手支援」が「人間教育」において大切であると考えていることが明らかとなった。また、インタビューから、指導者が自身の指導に対する内省を深めることで、指導者の考えに特異性が生まれ、特異性をぶれずに一貫して指導することが、競技レベルの向上に影響を与えている可能性が示唆された。

## 引用文献

- ・ Andrew Bennie and Donna O'Connor. (2011) An Effective Coaching Model : The Perceptions and Strategies of Professional Team Sport Coaches and Players in Australia. International Journal of Sport and Health Science (9):98-104.
- ・ Bloom, G.A. (2002) Coaching demands and responsibilities of expert coaches. In J.M.Silva and D.E.Stevens (Eds.), Psychological foundations of sport. Boston,MA:Allyn and Bacon. p.438-465.
- ・ カーラ・ウィリッグ：上淵寿ほか訳（2003）心理学のための質的研究法入門．培風館：東京， p.202.
- ・ Côté,J.,Salmela,J.,Baria,A.,and Russell,S. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data. The Sport Psychologist June7(2):127-137.
- ・ Côté,J.,Salmela,J.,Trudel,P.,Baria,A.,and Russell,S.(1995) The coaching model:A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge.Journal of Sport and Exercise Psychology (17):1-17.
- ・ Côté,J., and Sedgwick, W.A.(2003) Effective behaviors of expert rowing coaches: A qualitative investigation of Canadian athletes and coaches. Int. Sport Journal., 7(1): 62-78
- ・ Culver,D.M.,Gilbert,W.D.,Trudel,Pierre.(2003) A decade of qualitative research in sport psychology journals:1990-1999. Sport Psychologist (17).
- ・ FIFA (2010) FIFA World Ranking, <http://www.fifa.com/worldfootball/ranking/lastranking/gender=m/fullranking.html>, 2010.12.15 閲覧.

- ・ 船橋孝恵（2005）教養としてのスポーツ心理学. 徳永幹雄編. 大修館書店：東京, p.152.
- ・ Gilbert, W.D., and Trudel, P. (2004) Role of the coach: How model youth team sport coaches frame their roles. *The Sport Psychologist* (18):21-43.
- ・ 本田裕一郎（2009）高校サッカー勝利学. 株式会社カンゼン：東京, p.15, p.186.
- ・ ジョンソン＝レアード, P. N. (1988) メンタルモデル：言語・推論・意味の認知科学. 海保博之監修. 産業図書：東京.
- ・ 北村勝朗（2004）「教育情報」の視点による「コーチング」論再考：ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として. *教育情報学研究* (2)：71-80.
- ・ 北村勝朗・永山貴洋・斎藤茂（2005）優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. *スポーツ心理学研究* (32)：17-28.
- ・ 小峯忠敏（1992）動！小峯忠敏の熱い風. 大貫哲義著. 日本テレビ放送網株式会社：東京, p.229.
- ・ 古賀康彦・堀野博幸（2013）Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較. *スポーツ科学研究* (10)：173-182.
- ・ 古沼貞雄（2006）古沼貞雄 情熱. 元川悦子著. 学習研究社：東京, p.50.
- ・ 黒田和生（2008）トモニコウ. アートヴィレッジ：東京, p.24.
- ・ 松田保（2003）一流選手を育てるとはどうか. 株式会社二見書房：東京, p.42.
- ・ 森敏明（2002）動きながら識る, 関わりながら考える. 能智正博ほか編. ナカニシヤ出版：京都, p.27.
- ・ 大榎克己（2008）サッカー監督の流儀. 羽中田昌編. スキージャーナル株式会社：東京, p.111.
- ・ 斎藤重信（2007）盛岡商 斎藤重信発 夢は叶う. ベースボール・マガジン社：東京, p.80.
- ・ 柴田峯（2008）サッカー監督の流儀. 羽中田昌編. スキージャーナル株式会社：東京, p.226.
- ・ 上田亮三郎（1992）動！小峯忠敏の熱い風. 大貫哲義著. 日本テレビ放送網株式会社：東京, p.110.
- ・ ウヴェ・フリック：小田博志ほか訳（2002）質的研究入門「人間の科学」のための方法論. 春秋社：東京, p.19.
- ・ やまだようこ（2007）質的心理学の方法. 新曜社：東京.
- ・ 山本佳司（2006）野洲スタイル. 角川書店：東京, p.22, p.95.
- ・ 横山勝彦・望月慎之（2005）文化装置としてのスポーツー「区分」社会からの脱却ー. *同志社保健体育* (44)：p.4.